〈そっちでやったほうが好きなことを好きなようにできていいんじゃないの？〉という判断に至って。そういうことになれば、もう遠慮なく新曲だけでアルバムを作れちゃうし、そういった流れの結果としての全12曲という感じですかね。
――美味しい話を探すことに労力を費やすよりも、表現者としての自由さを尊重したかった、と？
高野：うん。振り返ってみたら〈俺、社長じゃん！〉というのがあって（笑）。好きにやっていいんだった、と気付かされたんです。予算はさほどないけども、自分たちでやれる基盤はあるし、スタッフもいるし、なにしろ自分たちをフォローしてくれるファンの人たちもいてくださるわけなので。そこで自由に好きなことをやるっていうのは、皆さんを巻き込みながら皆さんが喜んでくれるような結果を出すってことだと思ってるから、そっちを優先したというか。それができる自信もあったしね。実際、1曲目の“THE WILD BUNCH”とか9曲目に入ってる“誘惑”、10曲目の“Yabadabadoo”とかは、2017年の今頃にはもう全然あったんですよね。ライヴではやってなかったけども。曲の構成もできていて、あとはもう歌詞乗っけるだけだぞ、ぐらいのレベルまで行ってたのが他にも何曲かはあったし。そんななかで俺、最近、毎年1月から3月にかけて東名阪で弾き語りのライヴをやってたりするじゃないですか。ピアノの佐藤 統、ベースの小林 勝とデュオでやるパターンもあれば、完全にひとりでやることもあるわけですけど、ひとりでやる形式のときは、かならず新曲をやるようにしていて。そこで今年に入って作った“Jane Doe”と“John Doe”というのをやってみたんですよ。するとやっぱ感覚的に新鮮だし、さらに掘り下げたくなるし、どんどんそこから妄想が広がっていった部分というのもあって。それで結果、『THE WILD BUNCH』っていう漠然とした無法者的なイメージのなかに、より具体的な要素が加わることになったというか。だから、アルバム自体の大枠のところは去年のうちからあったけども、今年に入ってからそれをより具体化していくためのものが加わって、そこからギュギュっとまとめていく作業をしてきて……。
――弾き語りでやってみたその2曲の登場によって、作品としての着地点が見えてきた、ということですか？
高野：そう、そこでクリアに見えてきた。ただ、『THE WILD BUNCH』なんていう巨大なテーマがあるのに、ジョンとジェーンのストーリーが絡んできて、コンセプトとしては若干ねじれが生じてるよな、とは思ってるんだけど（笑）。
――ちょっと要素を欲張り過ぎた映画みたいな作品、というか。
高野：うん。ある意味、盛り込み過ぎな海外ドラマ展開ですね（笑）。これはちょっと来シーズンまで引き延ばしていきたいからあらかじめサブストーリーをぶち込んでおく、みたいな。少しばかりエピソードを先に披露しておいて、じらしていくっていう。
――いやらしい手法ですね（笑）。いわば、先行型スピンオフみたいな。
高野：ああ、そういうことになるのかも。実際、途中にそういうストーリー展開を盛り込みながら、するするするっと本編に戻って終わっていく、という構成にはなってるかもしれない。
――双方の物語はまったく別個のものだし、ジョンとジェーンのストーリーは次のために温存しておくという選択肢もあったはずですよね？
高野：確かにね。実際そう思ってもいたんだけど……なんか最近、出し惜しみを止めようという自分がいるんですよ。できたものはどんどんその場で出していくっていうか。そういう時期に来たかな、と思っていて。
――とはいえ、これまでも出し惜しみはしてこなかったはずです。